

## 研究ノート

夏目漱石とヴァーノン・リー (Vernon Lee) ——  
文学と感情について

東北大学 木戸浦 豊 和

Vernon Lee (本名 Violet Paget, 一八五六—一九三五) は近年ヨーロッパ文学研究の中で復権の機運の高い作家・評論家の一人である。ヴァーノン・リーは英国人の両親のもと、フランスで生まれ、イタリア・ドイツ・スイス・イギリスなどヨーロッパ各国に居住した。彼女は一八世紀イタリア美術の評論を刊行し作家として出発するが、彼女が関与した評論の対象や文学のジャンルは、ゴシック小説・戯曲・旅行記・文学理論・美学・心理学など多岐に渡る。彼女の小説や評論は、ウォルター・ペイターやオスカー・ワイルド、ウィリアム・ロッセッティ、ヘンリー・ジェイムズなど当時の著名な評論家・小説家から称賛を得ると共に、ブルームズベリー・グループのロジャー・フライやヴァーニア・ウルフなど後続の世代への影響も指摘されている。しかし、特定の国家に帰属させたり既存のジャンルに包含させたりすることの極めて困難な、彼女の汎ヨーロッパ的・ジャンル越境的な広範な活動が災いしてか、リーの小説・評論は暫くの間、忘却に等しい状況にあった。ただし最近、ヴィクトリア時代から二〇世紀前半の女性作家を再発見する研究の潮流の中で彼女は、唯美主義からモダニズムを繋ぐ存在として再評価されると共に、ジェンダー批評やクイア批評の観点からも関心を集めている。四〇を超えるリーの著作のうち日本語に翻訳されているのは、「聖エウダイモンとオレンジの樹 (St. Eudemon

and His Orange-Tree) (西崎憲編訳『短編小説日和—英国異色傑作選』ちくま文庫、二〇三年) や『七短剣の聖女 (The Virgin of the Seven Daggers) (西崎憲編訳『怪奇小説日和—黄金時代傑作選』ちくま文庫、二〇三年) など数編の幻想的な短編小説や、紀行文の一部の他、雑誌に発表した文学論などを纏めた *The Handling of Words and Other Studies in Literary Psychologies* (1923) の抄訳 (『ちくまの美学』栗原裕・荒木正純訳、大修館書店、一九七五年) など少数に留まる。リーは今後、日本でも一層の本格的・体系的な紹介の待たれる作家・評論家である。

さて膨大な夏目漱石の研究史の中でも漱石が『文学論』(一九〇七)の「第四編 文学的内容の相互関係 第二章 投出語法」においてヴァーノン・リーに言及していることは殆ど注目されていない。『文学論』第四編では「読者の情緒を動かす」文学的技法として「動情的の語法」が分析される。その中でも「投出語法」とは、漱石によれば、人間が「宇宙の万象を解釈する」際に「自己」を「標準」として対象に「自己の情緒」を「投出 (projection)」して「理会」する、人間の基本的な認知能力 (吾人の心理的習癖) に根差す言語表現である。言い換えれば、人間は自己の感情の状態や身体感覚などを外界に投影し、類比類推することによって対象を理解する傾向がある。つまり、漱石に従えば、端的には擬人法などの言語表現が「投出」的な人間の認知能力に関係するとされる。そして漱石は、人間の認知能力と言語表現との関連に言及した論文として、リーの *Recent Aesthetics, The Quarterly Review*, No.398, 1904 を取り上げ、「吾人の内的経験を投出して、日常目撃する實在物体に適用する作用」を紹介するのである。

この論文の中でリーは、対象に「自己を投げ入れる (putting ourselves inside)」ことによってその対象に自己自身の感情や行動との類似性を見出すことをドイツ語では「Einfühlung」と呼び、この言葉は文字通り対象の中に「自己自身を感じ取ること (feeling ourselves into)」を意味すると指摘する。続けてリーは外界の対象に自己を「投影 (projection)」する働き、つまり「Einfühlung」の作用は、すべての「詩 (poetry)」に見出すことが可能であるのみならず、日常的な言語の用法の基底を構成するとも主張する。

以上の簡略な要約から推察されるように、リーの論文 *Recent Aesthetics* の趣旨の一端は、ルドルフ・ヘルマン・ロッツェなどを嚆矢とし、テオドール・リップスによって大成される「美的感情移入 (aesthetic Einfühlung)」説をイギリスに紹介する点にあった。そして実はヴァーノン・リーは英語圏において「感情移入 (Empathy)」という言葉を最初期に使用し、流布させると共に、独自に「Empathy」の理論を展開した作家でもあった (なおドイツ語の「Einfühlung」を「Sympathy (=together feeling)」とは異なる、[Empathy (=in feeling)] という英語に「翻訳」したのは、心理学者エドワード・ティチナーであると考えられる)。そしてリーは、一九二二年に刊行した *Beauty and Ugliness* という美学書に論文 *Recent Aesthetics* を再録する際、ドイツ語の「Einfühlung」を「Empathy」という英語を逐一補記している。

以上のヴァーノン・リーの論文を参照することによって、漱石の『文学論』について新たに次の点を指摘できる。従来の研究史では『文学論』における漱石のレトリックの認識の大部分は、一八世紀後半から

一九世紀にかけて刊行された、旧弊な修辭学の伝統を汲む文典や修辭学書に依拠することが指摘されて来た。しかしリーの論文への関心は、漱石は、所謂「旧修辭学」のみならず、当時イギリスに導入され始めていた「感情移入美学」に基づいて、人間の心理や認知との関連から言語表現を理解しようとする、文学論や美学の動向をも見据えていたことを示唆する。また、『文学論』におけるリーの論文への言及は、島村抱月「芸術と実生活の界に横はる一線」(『早稲田文学』一九〇八年九月) などと共に、日本における最も早い時期の「感情移入美学」の受容・紹介と見なすことが出来るだろう。

そして、さらに言えば、漱石の『文学論』とリーの『ちくまの美学』は同一の理論的前提を共有するように見える。リーの『ちくまの美学』は文学表現が読者に与える心理的・感情的な効果を主題とする点で一種の「読者論」的な特徴を備えている。そして漱石の『文学論』もまた読者の情緒や感情の反応を重視する点で「読者論」的な文学論として捉えられて来た。このように読者の感情に与える影響・効果・反応を焦点化する両者の〈感情〉の文学論は、極めて大局的には、心理学が徐々に実証主義的な科学としての体裁を整え、哲学に代わる諸学の基礎学として期待されていた時代の文学理論として理解することが出来るだろう。